



令和7年度 第4回共同機構研修会

往還型の研修 ～子どもの困りを読み解き支援を考える～

講師 岡崎 達也さん（公社）京都市児童館学童連盟事務局主任厚生員統合育成担当

昨年度に引き続き、発達特性からくる子どもの困りをテーマに実施しました。それぞれの園の子どもの姿から事前にアセスメントを行い、研修当日は、講義を聴いたり、グループ討議で子どもの困りを多面的に捉えたり、アドバイスをし合ったりして子ども理解を深めました。また、岡崎先生から一つ一つのケースに直接アドバイスもいただきました。

① 事例検討シートの記入

② 事前に同グループの事例を共有

③ 集合研修にて

- ・岡崎先生の講義・アドバイス
- ・グループ討議

④ 事後レポートの作成
と共有

⑤ 研修を実践に活かす

<受講者のレポートより>



往還型研修に参加して、実際に困り感のある子どもへの対応をどのようにされているのか各園によっての違い等も知ることができて良かったです。また、その対応のメリット、デメリット等も聞くことができたので自園でも活かしやすいと感じました。それぞれの園によって環境や人数など違いはあるけれど、それぞれが子どものために様々な工夫をして保育に活かしていることが知れて良かったです。今後は、今回の研修で学んだことを職員間で共有し、より良い保育となるようにしていきたいです。

グループ討議が大好評

具体的な見解を教えてくださいました。子どもの姿を見て、どこに困りごとがあるのかに気づいてもなかなか言葉にして表現することが難しいと思っていました。シングルフォーカス、視覚素材に対するつよい関心など・・・言葉にさせていただくと私自身の焦点がはっきりとしたように思います。気になる行動ポイント、得意なこと、対応についての見解によって、ぼんやりしていた支援が明確になりましたので、本児の困り感に寄り添いたいと思います。

今後の対応が明確に

対応の難しさに共感

事前にグループ内の気になる子どもについて、内容を理解できたことで、共有することへの目的をもって臨むことができた。また、子どもの困りについて、似たような内容も多く、みんなで共感しながら和やかな雰囲気です話合うことができて良かった。

ご参加ありがとうございました

今回は、それぞれのケースに岡崎先生のアドバイスをいただき、今後の保育の方向性が明らかになったとのコメントがたくさん寄せられました。

こどもみらい館開館 25 周年記念動画配信 令和7年11月30日(日)まで

マメ(大豆生田 啓友) 先生が伝える 「幸せ子育て」のコツ

- ① 乳幼児期は「遊び」が学び
- ② 絵本の読み聞かせの大切さ
- ③ 「幸せ子育て」のために

動画はホームページから
または
2次元コードを読み込んで
御覧ください



「かがく遊び」のすすめ

～「物」と「現象」と関わる遊びで育まれる好奇心・探究心・思考力～

講師 小谷 卓也さん 大阪大谷大学教授

「かがく遊び」は、テレビで見るサイエンスショーのような大がかりな装置や派手な演出で子どもを楽しませるものでもなく、正しい科学知識を子ども達に教えるものでもありません。「かがく遊び」は、乳幼児が「物」や「現象」と関わって思考する遊びで、これを通して「物」・「現象」の性質や仕組みを感じとらせ、最終的に「自分なりの理屈(考え)」を構築させることと、自力で思考のスキル(=science process skills)を獲得させることをねらいとしています。

「思考のスキル」(science process skills)としては、観察のスキル、分類のスキル、コミュニケーションのスキル、推論のスキル、測定 of スキル、系列化のスキル、予測のスキルなどが挙げられます。

「かがく遊び」で得られた「自分なりの理屈」は、厳密な科学の作法(仮説検証)を通して構築されたものでないので、必ずしも科学的に正しい理屈ではありません。ここで大事なことは、「自分なりの理屈」が、子どもが自分で考えた理屈であるということです。これまで大人が正しい方向・間違わない方向に過度に子どもを導いてしまった結果、子どもは自分で考えようとはせず、正しい理屈を大人達から安易に獲得しようとする事が多かったのではないかと私は思っています。大人から過度な関わりを受けた子どもは、わからないことがあると誰かに聞けばいい



◆「かがく遊び」の実施方法◆

ステップ1：子どもに関わらせてあげたい「物」または「現象」を選択する。

ステップ2：「知的な気づき(=保育者が子ども達にどんな物の性質や現象の特徴を伝えたいのか)」を設定する。

ステップ3：子どもが自力で「知的な気づき」に気づけるような物的環境を構想する。

ステップ4：構想した物的環境(=教材)は子どもが操作可能か、安全かを予備実験で確かめる。

ステップ5：「かがく遊び」を実施する。

ステップ6：探索活動の過程で気づいたことを共有する。



と思います。この意味から「かがく遊び」では、「自分なりの理屈」の科学的な正しさよりも、自分で考えたかどうかが重要だと考えているのです。

「かがく遊び」は、上記の6段階のステップで実施しますが、①知的な気づきの設定、②互いに性質の異なる教材配置、③1人1セットの教材配置がポイントとなります。①の知的な気づきの設定では、保育者が乳幼児に出会わせたい「物」・「現象」を確定し、そのための環境を整えます。子どもをよく見て興味があるもの、興味がわきそうなものを設定しましょう。②の互いに性質の異なる教材配置によって、子ども達は「物」や「現象」の比較と分類を通して、自力で様々なことに気づきやすくなります。そして、③の教材配置により、子ども達1人1人が「物」や「現象」と自分のペースで好きなだけ探索でき、そのような探索過程を通じて「自分なりの理屈」を構築しやすくなっていくと考えています。

「かがく遊び」にご興味を持たれた先生方には、ぜひ、一度、実践していただければ幸いです。

***** 受講者のコメントから *****

「かがく」と聞いてハードルが上がっていましたが、実際の映像や実践例を見て安心しました。教えるのではなく、環境を整え、自分で考えるのを待つことが大切だとわかり、やってみようと思いました。

「物」や「現象」との関わりの中で自分なりの発見・思考を大切にしながら結果を得ることで、一人ひとりの思考力が深まり、興味・関心がさらに広がっていくと思いました。できる範囲ではありますが「かがく遊び」に挑戦してみたいと思います。

DVD貸出中

子どもたちがあそびを通して、自分で感じ、考えて「自分なりの理屈」や「納得」が
出せるようなサポートをしていける保育士でありたいと思いました。



「幼保小の架け橋プログラムの全市実施へ ～幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなげるために～」

講師 佐川 早季子さん 京都教育大学准教授

1. なぜ、今、幼保小接続なのか・・・小学校入学期の子どもの課題

① 学びに向かう力：人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりする力が、1年生になると落ち込んでしまうというデータがあります。

（ベネッセ教育総研次世代育成研究室「幼児期から小学校1年生の家庭教育調査」より）

② 小1プロブレムの時期の対策にも一定の効果はあったが、現在は1年生の不登校児童が急増しています。



2. 幼保小接続をする良さ

① 教師の1年生観や子ども観を変えると子どもが安心して登校し、不登校児童も減ると期待されています。

② 実際の保育・授業を見合って話し合うと、子どもの力を引き出しつつ、より主体的に学ぶよう授業や保育の改善ができ、子どもや先生が変わっていくことにつながります。

幼保小接続の取組が推進されることにより、子どもが先生を好きになる→学校を好きになる→学ぶことが楽しく面白くなる→登校渋りがなくなる→子どもも先生も主体的になる、といった効果が生まれます。子どもに不利益が生じないよう、子どもが小学校への準備をするのではなく、小学校が子どもを迎える準備をするという発想の転換が必要です。

3. 幼児期の遊びの中の学びを小学校の学びにつなぐ

① 幼児教育の基本：環境を通して行う教育
・幼児教育では子ども自らがやりたくなる環境を作ります。小学校以上でも子どもの心が動く環境は作れるのではないでしょう。

② 保育実践から遊びの中の学びを考える・・・具体的に話し合しましょう。
・教育的瞬間（子どもに教育的な働きかけをしなければならない瞬間）を捉え働きかける保育者・教師の専門性が重要です。
・遊びの中の学びは見えづらいため、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）を幼保小で共通言語として子どもの学びを語り合しましょう。
・子どもを見るまなざしをつなげましょう。子どもは、安心感さえあれば何でもできる存在、幼児期にたっぷり学んできているという肯定的な子ども観を持ちましょう。子どもの声を聴き生かす授業へとつなげていきましょう。

4. まず何をすればよいか

架け橋プログラムの推進に向けて

① 架け橋ミーティングの開催 ② 担当者同士の顔の見える関係性 ③ 互いの年間計画の共有

出来ることから始めよう

・交流は幼保小接続の一つの手立てです。交流の前後の話し合いや指導案の共有が重要です。具体的な一場面を取り上げて、共通する視点から小学校教育と幼保の保育がどのようにつながるのかや、幼保小で目指す子ども像につなげるためにどのような環境や援助が必要か話し合うことが大切です。本音で話し合える関係になると、保育・授業の改善につながっていきます。

→何よりも大事なことは、本音で話し合える幼保小の教員・保育者の関係性を築くことです。

***** 受講者のコメントから *****

実際に小学校の先生と話せることでどんなことを大切にしていかなければならないか考えるきっかけになり、とてもよい学びになった。

今年度から架け橋プログラムが全市で展開され、今から接続連携を密にしていこう、校が多いと思うので、座談会のような取組で思っていること、悩み、具体的な実践例の共有をしたいと思った。

架け橋プログラムについて、今まで受けた研修とは違う視点で考えさせられることがたくさんあった研修でした。とても学びになりました。

幼保小連携の実際の取組など、どのように研修をされているのか、どのように交流しているのか、どのようにしたら小学校で理解が進み取組が進んでいくのか、もっと知りたい。

幼保小の架け橋プログラム 公開授業と事後協議

【in 祥豊小学校 令和7年6月12日】

（祥豊小学校と同区内の小学校・入学児童の在籍していた就学前施設）

祥豊小学校では、昨年に引き続き、本研究プロジェクト2年目の取組をしています。祥豊小学校区内には祥豊保育園があり、昨年も合同研修会や、交流保育・授業に取り組んできました。昨年度の合同研修会は、公開授業を見て、本研究アドバイザーの大倉得史先生の助言を聴き、子どもの心に思いを寄せ協議しました。

今年度も、南区内の小学校や、入学児童の在籍していた就学前施設の先生方と共に学び合いたいと、小学校から各校園にお知らせし、1年生の公開授業とその事後協議を実施しました。指導助言には、京都市教育委員会学校指導課の幼保小架け橋コーディネーターに来ていただきました。具体的に「10の姿」を通して子どもの育ちや授業について話し合うことで、様々な気付きがあり自身の保育や、授業を振り返る機会になった研修会でした。幼保小の架け橋プログラムについての理解も深まった研修会となりました。

■1年生の公開授業 生活科 「さいて ほしいな わたしの はな」

アサガオの観察から、「蔓が伸びてきた」「葉っぱがたくさんになった」とそれぞれに変化に気がつく子どもたち。全体の場での共有では「蔓が伸びてきた」の発言に担任の先生は「どのくらいある?」「みんなの背より高いんだ」「どうしたらいい?」と子どもたちの意見を聞き出していました。蔓が長くなった→どうする→切るという意見もあり、困ったら本で調べるといった意見も出ていました。子どもたちの考えや意見を肯定的に受けとめ、主体的にアサガオの世話を考えていけるようにしていました。

■グループ協議より(抜粋)

●「10の姿」について

・アサガオの葉の形をハートの形に見たてる、葉の数を数える、つるの長さを伸ばして調べる、腕にぐるぐる巻いて調べる等、子どもの感性を生かした調べ方が見られ、「感心・感覚」「豊かな感性と表現」の「10の姿」が見られた。

・自分のアサガオを触って愛でる姿、触りすぎて先が折れてしまう姿、その姿を友達が「大丈夫?」と心配する姿など、いろいろな姿から「10の姿」が見て取れた。

●先生の支援について

・「10の姿」が発揮できる土台は、先生と子どもの信頼関係がしっかりできているからと思う。なんでも先生に伝えられる雰囲気先生が作っている。
・ひらがなの学習がまだ途中段階と思うが、自分から書こうとする姿が見られていたのはどういう配慮をしているのか。⇒(担任)書きたい気持ちを大事にしている。その時々教えている。保育園・幼稚園でいろいろな体験をして思いを持って小学校にきていることを意識している。

■幼保小架け橋コーディネーターの助言

授業の中で「10の姿」はほとんど全て見て取れた。担任の先生との関係性があったからこそ子どもたちはそうした姿を見せる。小学校の授業には評価がある。本時の目標と「10の姿」について考えると、本時の目標は「アサガオの観察を通して、成長や変化に気付き、困ったことを相談したり調べたりして、世話を続けることができるようにする」であり、例えば、「観察を通して」には、「自立心」「協同性」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」等が関係している。

先生の支援については、支柱を立てることにおいても、子どもに選択させていた。個別最適な学びと繋がっていく支援だった。幼児教育は常に個別最適な学びをしている。本授業は幼児教育とのつながりが生かされた授業だった。

本日のような研修で、幼児教育と小学校教育の違いや類似点をフラットな関係で話し合い理解することが架け橋プログラムの大きなねらいの一つ、近隣の幼保小で関係性を深めていってほしい。



「先生あのね...」「うん?なあに」
「数量や図形、標識や文字などへの」



アンケートより

⑤ 就学前施設保育者 ⑥ 小学校教員

④ 丁寧な声かけや受け止め方、信頼関係の築き方などとても勉強になりました。「思わず～したくなる」といった声かけや環境設定を、今後、工夫していきたいです。

① 小学校に慣れてきたこの時期、1年生の行きしぶりが出てきます。本日の授業を拝見して、小学校がもっと子どもたちに寄り添った活動を取り入れなければ...と思いました。45分間の座学ではなく、もっと動きを取り入れて、子どもたちが「もっとやりたい!」と思える工夫をしていきたいと思いました。もっと架け橋プログラムを勉強します。

② 園でも取り組んでいるアサガオの栽培について、保育者主導になっている点が多々あったと反省させられました。まだ、支柱を立てていないので早速、考えたいと思います。10の姿を見直す(考える)機会もいただき、良い学びになりました。

③ 小学生を「10の姿」で見ることができ、改めて子どもの育ちのつながりを感じました。とても生き生きとした子どもたちの姿、それを支える教師のすばらしさなど、今日学ばせていただいたことを明日から生かしていきたいです。

子どもを育む喜びを感じ、親も育ち学べる取組を進めます。



【京都はぐくみ憲章】より

この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ!



発行日 令和7年 10月 22日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町 601-1
Tel : (075)254-5001 Fax : (075)212-9909
URL : <https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/>